

## 「わが青春の映画ベスト20」

～わが映画の友・故竹田周右氏に捧ぐ～

南部昌弘

わが青春時代の1940～60年代と云えば映画全盛時代で娯楽と云えば「映画」でした。それ以降映画とは切っても切れない「伴侶」となりました。とはいえ半世紀以上も「遠い昔」。色んな記憶も薄れ勝ちです。

老い先短い平成最後の今、振り返ってみると、さすがに映画の題名は覚えていてもストーリーは勿論俳優・女優の名前も勘違いしていることもしばしば。それを承知で今鮮烈に記憶に残っている俳優、女優の顔、シーン、音楽、セリフを中心に当時の「思い出」を外国映画ベスト20本、日本映画10本を選んでみました。(文中のイラストは親友竹田周右氏の形見の画集より抜粋いたしました)

### ・外国映画ベスト20



まず思い浮かぶのは**「第3の男」**。チターの奏でるあのメロディーを聞くたびに荒廃したウィーンの街の暗闇に突如浮かび上がるハリイ・ライムの顔、地下水道の追跡劇、ゴンドラと「～スイス100年の平和ははと時計一つ」のセリフ、、あの墓地の無言のラストのロングショット等々。見事なまでもモノクロームの映像と音の映像美の傑作！

ラストシーンと云えば「シェーン」も忘れられませんやはり**「太陽がいっぱい」**を挙げたいと思います。大画面いっばいに広がる眩しいばかりの地中海、きらきらしたアラン・ドロンの。ドロンの満足げな顔と対照に大音響のテーマミュージックの中、大画面いっばいにヨットに曳航された死体が揚がるラストは強烈なインパクトでした。

ドロンといえば、ジャン・ギャバンを挙げないわけにはいきません。二人の競演した「地下室のメロディー」も印象に残っていますが、なんととってもギャバンのギャング映画の原型？は**「現金に手を出すな」**です。

初老のギャング親分を「背中」で演じる姿、パンをむしゃむしゃ美味そうに食べる姿、女を平手打ちする非情な姿、グリスビーブルースの奏でるハーモニカのメロディーの中、金塊が燃えてゆくのを見つめるしかないギャバンの姿等々忘れられません。

忘れられない俳優と云えば、ジェームス・ディーンです。大学受験の合間に見た**「エデンの東」**のD・ディーンの今までにないキラキラしたキャラクターに強い衝撃を受けました。父親に喜んでもらおうと植えた豆を見つめる嬉しそうな顔、





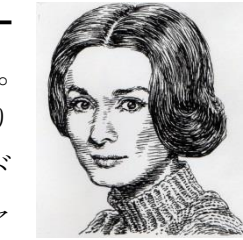
それが裏切られた時の悲しげな顔等々、瑞々しいばかりのデーモンを忘れられません。

デビューの鮮烈さで忘れられないのは「**ローマの休日**」のオードリー・ヘップバーンです。

映画そのものよりは、妖精が地上に舞い降りたかのような眩しいばかりの瑞々しいオード

リーの登場に心を奪われました。「シャレード」のようなシャレたオードリーも好きですが、「暗くなるまで待って」の盲目のオードリーも捨てがたいです。

映画の黄金期といえば、西部劇、西部劇といえばジョン・ウェイン。「駅馬車」は西部劇として一級品ですが、今現在の心境としては、ネイティブを「敵」として撃滅するのではなく友好を貫こうとした退役間近の J・ウェインの「**黄色いリボン**」を挙げたいと思います。



西部劇でもう一つ挙げるとすれば「**大いなる西部**」です。ダイナミックなテーマミュージックとともに広がるオープニング、ヘストンとペックの殴り合いのロングショット、水辺でペックとシモンズの心を通わす大アップ等一味違った西部劇として印象に残っています。J・シモンズのなんと美しかったことか……。

閑話休題 「スクリーン随一の美女はだれか？」

完璧な美貌の持ち主イングリッド・バーグマン、「クレオパトラ」のエリザベス・テーラー、気品高いモナコの王妃グレース・ケリーが挙げられますが「世紀の美女クレオパトラ」を演じ、「若草物語」の可憐な少女から「日の当たる場所」の美貌の令嬢、老いてなおジェット・リンクを恋焦がれさせ、華麗な女の一生を演じきった熟女リズこそそれにふさわしいと確信しています。



その「**ジャイアンツ**」はやはり忘れられない映画のひとつです。エリザベス・テーラーとロック・ハドソンの新婚旅行の帰り、牧場の入り口から自宅まで馬車で駆ける長い距離、無尽蔵なまでの「石油」、まさに「大いなるテキサス＝アメリカ＝ジャイアンツ」を実感させられました。

晴れの舞台で図らずもレズリーへの思いを吐露してしまう酔い潰れたジェット・リンク、長男のカラーの嫁が人種差別を受け、大男となぐり合い KO されたハドソン、今も心に残っています。

アメリカの大地をベースに南北戦争を題材にした超大作といえば「**風と共に去りぬ**」でしょう。ストーリー展開はともかく、今でも強く印象に残っているのは映



画の第一部の終了間際、戦火に焼かれたタラの大地に向かって、スカーレットが力強く再起を誓うシーンです。丁度見た時が受験失敗の直後で観劇後「振るい立った」のを覚えています。

もうひとつ青春の起爆剤となったのは「ピクニック」です。あの有名なムーン・グロウのメロウな曲に乗ってキム・ノバ

ックとウィリアム・ホールディングが踊る場面が特に印象的ですが、漠然と将来の不安を抱えていた身には、妹のM・オブライエンが「一生に一度は思い切った行動を・・・」の言葉とともに、バスが街を出てゆくロングショットが深く心に響きました。

ここまで書いてきて大事な人を忘れていました。



チャーリー・チャップリンです。洋画といえばチャップリンを外せません。「独裁者」や「街の灯」も大好きですが、やはり「モダン・タイムス」を初めて見たときの衝撃には及びません。人間が人間性を無視し機械の歯車のされてしまう機械文明＝資本主義への強烈な批判精神は、これから社会人になろうとしている時期には堪えました。しかしポーレット・ゴダート

との出会いと「ドリーム」の甘いメロディの流れるラストシーンには少し救われました。

もう一つは「ライムライト」です。甘く悲しいテーマミュージックとともに老ピエロが若いクレア・ブルームに淡い恋心を抱きながらさびしく死んでゆくシーンは、有名な戯曲のシラノ・ド・ベルジュラックとオーバーラップして「愛と死」の漠然とした「はかなさ」をしみじみ感じさせました。

あと残っているジャンルと云えば、サスペンス、ミュージカル、ディズニー、戦争物でしょうか？



サスペンスでいえば、ヒッチコック。いろいろ名作がありますが（私事ですが）一年前に骨折しギブス、松葉杖の生活を余儀なくされ、J・スチュアートの気持ちがよくわかりました。退屈な日常の中「他人の生活を覗き見したい」というなにげない好奇心が、一転恐怖のネタになるというヒッチコックならではの着想の「裏窓」に心惹かれます。もう一つは「恐怖の報酬」です。

イブ・モンタンがダイナマイトを運ぶスリリングなシーンの連続は、まさに手に汗を握りしめたものです。余談ですが、当時シャンソン歌手は高英男に代表される優男の印象が強か





ったが、モンタンのマッチョ振りに驚き、取りつかれレコードを買い、フェティバルの講演の切符に飛びつきました。結果は講演中止で涙をのみましたが・・・。



ミュージカルは「南太平洋」「王様と私」も大好きですが、やはりダンスの斬新さに「こんなミュージカル映画があるのだ！」との衝撃を覚え、自分のミュージカルの概念に革命を起こした「**ウエスト・サイド物語**」に決めました。

戦争物といえば、「**地上より永遠に**」を挙げたいと思います。バート・ランカスターとデボ

ラ・カーの渾身のラブシーンは衝撃でした。またモンゴメリー・クリフトが軍隊生活の不条理に怒りを爆発させ殴り合うシーンと夜明けに F・シナトラへの追悼を込めて吹くトランペットのシーンは印象的且つ感動的で今もはっきり記憶しています。



ディズニー映画としては、当時は「白雪姫」昨今は「アナ雪」等が定番ですが、当時は「砂漠は生きている」「ファンタジア」に魅了されました。「砂漠～」は記録映画を全く創作映画にしている手法に脅かされましたが、やはり音楽をアニメーションで完璧に映像化した「**ファンタジア**」のアニメーション技術には度肝を抜かれました。今でもミッキーが箒と踊っている姿が目には浮かびます

あとは少し長くなり過ぎたので簡潔にいたします。



スチーブ・マックイーンの颯爽たるオートバイ姿に魅了された「**大脱走**」、お色気満点ショーン・コネリーの「**007危機一髪～ロシアより愛をこめて～**」等の007シリーズ、「**7人の侍**」のリメイクですがそれに劣らぬ「**荒野の7人**」。以上3作はエンターテイメント映画の最高傑作のひとつだと思います。



## ・日本映画ベスト10

見た数で云えば外国映画に比べて圧倒的に少ない日本映画ですが、黒沢、三船、裕次郎に尽きると思います。女優は高峰秀子でしょう。

なんととっても「**7人の侍**」です。脚本、俳優、音楽、カメラ等が一体となってファーストシーンからラストまで、人馬一体となって戦場を駆け抜けたよう完璧な映画だと思います。交響曲でいえばベートーベンの「運命」でしょうか、一方同じ黒沢の作品ですが「**生きる**」はゆったりとした大河の流れを思わす大作です。いわばマーラーでしょうか？

平々凡々とした役場の日常、末期の胃がんの宣告からの絶望感、何かを取り返そうとの当てもなく夜の街の彷徨、女子社員との不器用なデート・・・突然憑かれたように公園建設に奔走、完成の暁、雪の公園のブランコに揺られなが

ら「命短し♪～」とひっそりと落命。志村喬の鬼気迫る演技に時間を忘れて引き込まれてしまいます。「人それぞれの使命は？」を考えずにはおれません。そして役所の同僚達の生前の「渡辺さん」を偲ぶ「お通夜」のシーン。このシーンを見るたびに、自分の通夜の場面を想像し、お棺の中で「どんな話が飛び出すのか？」聞いてみたいという誘惑に駆られます。(話は飛びますが) 昨今家族葬とかで寂しい通夜、葬儀が多く見られます。しかし私は通夜に駆けつけた友人、知人にはお酒など十分に振舞い、賑やかに送ってもらいたいものだと願っています。しかし生前を知る人が居なくなるという「長寿は悲劇」はご免こうむりたいものですが・・・。

黒沢映画が続きますが、三船敏郎の「用心棒」。存在感溢れる素浪人姿で登場するシーンに始まり、ヤクザをあの手この手で手玉に取り、最後仲代達矢とのリアリズム満点の決闘シーンは、東映チャンバラに慣れた手合いには瞠目の連続でした。

もう一つ三船で忘れられないのは「無法松の一生」です。博多の車引きの松五郎が恋焦がれる未亡人にやむに已まれず迫り、「おくさん！オレの心はきたない！」と退散。死後の遺品の中には奥様から頂いた心付け、菓子等すべて残していたという不器用なまでの男の生き様に共感感動したことを覚えています。

今一つは「**檜山節考**」が挙げられます。

「檜山～」有名な姥捨て山伝説に基づく話で、当時は「非人道的、残酷！」と感じたものですが、今にして思えば、老婆は喜んで死を選んだのではないか？若い者に迷惑をかけながら生きながらえるより「雪の中での死は安楽死」と貧しい当時の日本人の「知恵」ではなかったか？との思いです。今も昔も「親が子にしてやれることは、早く死んでやることです」との言葉が身に沁みる今日この頃です。

この無法松も檜山もカラーでリメイクされていますが、「ビルマの豎琴」も市川崑が中井貴一でリメイクしています。「水島！一緒に日本に帰ろう～」との大合掌と「埴生の宿♪」のメロディーはいまも耳の底にこびり付いています。

もう一人の昭和の大スターはいわずと石原裕次郎です。

「裕ちゃん映画」の代表作といえば「嵐を呼ぶ男」など多々ありますが、わたしは彼のデビューがD・ディーン、O・ヘプバーンを彷彿させます。

映画「**乳母車**」は石原裕次郎という個性豊かな新鮮な「スター誕生」を予感させられたので、あえてこの映画を挙げました。その昭和を代表する三船と裕次郎の晩年の競演を実現させた石原プロの渾身の大作「黒部の太陽」も日本人の魂と技術力と汗の結晶「黒部ダム」を描いた作品で見逃せません。

もう一人俳優をあげるとすれば高倉健でしょうか？

健さんもヤクザ映画でその存在感を發揮していましたが、後の大スターの地位

を確立した映画は「**幸せの黄色いハンカチ**」ではなかったかと思います。  
ムショから出てきて倍賞千恵子が、はたして待っていてくれるか？と何度も逡巡しつつ、ついに決心して向かった先に、数知れない目印の黄色いハンカチ。  
あのラストシーンは健さんの思いとともに感動の嵐でした。  
女優さんで印象にのこるのは高峰秀子です。

「カルメン故郷に帰る」を始め多くの名作、大作で数々の名演技を發揮していますが、一番印象に残っているのは「**二十四の瞳**」です。のどかな小豆島の女の先生と子供たちの生活が戦争によって一変してゆくさまを、大上段に振りかぶらず淡々と描いでゆく物語の展開は、同じ世代に生きたものとして「反戦」を身に染みて感じました。

残る2つは喜劇映画と娯楽映画を選びました。

喜劇映画は「**幕末太陽伝**」です。話は映像落語として抜群に「面白い!」。フランク界の底抜けの明るさ軽妙さとふてぶてしさは、幕末の動乱期の庶民の腰の据わったど根性を感じました。「7人の侍」の百姓の逞しさに通ずる町人の逞しさですかね……。喜劇を超えた代表的な喜劇だと思います。

映画はエンターテイメントか芸術か？と云えばエンターテイメントの要素大だと思います。娯楽の少ない当時何かと云えば気晴らしに映画を見たものです。

山田洋二の「**寅さんシリーズ**」はまさに日本的は最高の娯楽映画です。TVの「水戸黄門」を「大いなるマンネリズム」と評した人がいましたが、「寅さん」はまさにそれです。毎回安心して同じように笑い、泣きストレスを発散できる偉大なる装置でありました。

以上長々とまとまりもなく述べてまいりましたが、かなり一方的、偏見に満ちた所見になっていると自覚しています。特に心残りには、「**舞踏会の手帳**」と「**わが青春のマリアンヌ**」です。前者は映画館を出た瞬間から、あのテーマミュージックが耳の中で鳴りやまず、今もあのメロディーとともに数々のシーンが眼に浮かびます。後者は小学校時代のマドンナと「偶然」デートした「記念すべき」作品です。ストーリー等一切おぼえていませんが……。

日本映画でいえば嵐寛十郎の「**鞍馬天狗**」です。白馬に跨り駆けつけ館内は万雷の拍手。感動で胸震えました。グローバリズムに侵され日本らしさが消えゆく不透明な中、世直しのヒーローを待ち望む未熟なノスタルジーでしょうか？

感想もかなり当時のものと異なっています。あくまで拙い記憶に基づく現時点でのベスト20、ベスト10であると付記しておきます。

平成最後の一月

徒然なるままに～能登「南なん亭」にて